平成 25 年 11 月号　№445

なかま

発　行
佐倉市立中央公民館
編　集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町 198-3
電話（043）485-1801

夏の思い出---------- 中村　庄治
歌舞伎観劇---------- 堤　源太郎
日日是好日 ---------- 福島　健司
水彩について---------- 安保　昌浩

忍城と古墳

押木　恭子

昨秋、埼玉県行田市にある忍城（おしじょう）を見に行った。佐倉から関越自動車道で、片道３時間位かかったろうか。

堀を渡り、大手門をくぐると、郷土博物館があり、復元された三階櫓（やぐら）と繋がっていた。地元の人達は、秀吉と戦って破れなかった城として、今も誇りにしている。あちこちにのぼりが立てられ、長身の若者が甲冑を身につけて出迎えてくれた。

１５９０年、豊臣秀吉の小田原征伐の時、関東には北条方の武将の城が数多くあったが、その中で成田氏長の居城忍城は激しく戦って、なかなか陥ちなかった。そのため秀吉の命により石田三成は、面積にして備中高松城の10倍ともいわれる、広大な水攻めを行ったと伝えられている。

城は利根川と荒川に挟まれた平地にあるため、城の周囲に堤防を築き、その上流の堰を切って水を流すというもので、工事には多くの人夫を要したという。破格の賃金を提示したため、中には敵兵も金銭欲しさに加わったというから面白い。その数約10万人で、工事は一週間足らずで完成したと伝えられている。その「石田堤」と呼ばれている堤防は、高さ３㍍、幅員19長さ28㌔に及んだという。しかし地形上完全に水没することはなかった。そして一か月は持ちこたえたが、小田原城が陥ちると、そこに詰めていた城主の命により、ついに開城させられたといわれている。

そこから３㌔程離れた所にさきたま古墳群がある。「さきたま」とは埼玉のことで、そのなかに有名な稲荷山古墳があった。今から45年前、「ワカタケル大王（おおきみ）」（雄略天皇）と読める金象嵌銘鉄剣が出土したので、こんな関東から出るとはと、興味を持ったものだった。

そのすぐ隣には、高さ約19㍍のお椀を伏せたような丸墓山古墳があった。三成はそこに登って忍城を眺め、作戦を立てたといわれているので、同じ所に立ってみると、なるほど城がビルの間に、手の平に乗るほどの大きさに見えた。

その戦いの様子が、佐藤浩市や野村萬斎の映画「のぼうの城」になったので、早速見に行った。城とその地形を知っていたので、とても面白かった。

行田市駅の周辺は、一面緑の草に覆われた大小の古墳群と再建された戦国時代の忍城があり、とても見ごたえがあった。近場であのように、タイムスリップするような感覚を味わえるとは思っていなかったので、いい思い出になった。

（編集委員）

夏の思い出

ある日、カレッジの仲間と会食した時、鍋料理が出て来ました。固形燃料に火がつけられ料理が始まりました。仲間の１人が金属で出来た平らなシャモジの様な物を手に取り「なんだこれは？」と言いました。私は「固形燃料の火消しだ」と説明しました。ふと、若い頃の尾瀬のある情景が思い出されました。

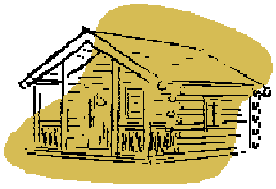
弟と２人が山小屋に到着した時は、ドシャ降りの雨になっていました。炊事場は炊飯する人で混み合っていましたが、私たちは持参の石油コンロで料理を始めました。その時、横にいた人が「そんな事するとあぶないぞ！」と怒鳴りました。ふと隣の２人連れを見ると、メタ（缶詰の固形燃料のこと）に蓋をして靴で踏んづけていました。山慣れている人達は「離れろ！」と怒鳴りましたが、当の２人はキョトンとしていました。その時「バン！」と大きな破裂音がして火が噴き出しました。その火は１人の目を直撃したようです。転げ回っていました。

山小屋の人がその人を背中に背負い込み、小屋の人３人とけが人の仲間１人がロープで繋がり出発しました。外はドシャ降りの雨で木道が流されているとのことでした。問題のメタは黒こげで蓋は曲がっていました。

翌日はよく晴れた尾瀬日和で流された木道に注意しながら下山しました。

メタが燃える青い炎を見ながらあの時の情景を思い出しました。

（山崎　中村　庄治）



日日是好日

我が家の家計担当は、サンデー毎日の日々を過している世帯主の私である。現役時代家計の事は、すべて妻任せだった。時間も無かったし、興味も無かったからだ。妻は、夕食後毎晩机に向かって家計簿に記入していた。年明けには、１年分の収支を纏めて私に報告していた。それは手書きで作製した我が家の決算書だった。

現役を引退する少し前に、エクセルで日々の家計収支を入力する表を作製し、妻にこれを利用すれば、日々、月次、年次の合計が自動計算可能だと提案した。ところが、妻はパソコンの苦手意識が強く触ろうともしない。それで遂に「入力してやるよ」と言ってしまった。これが運の尽きでそれ以来、家計担当となり８年が過ぎた。

然し、これが意外と面白く様々な発見があった。結構２人で気儘に外食をしていたが、思ったより食費は安い事、逆に車の維持費と冠婚葬祭費、そして税金は高額である事だ。特に車は、２台所有している故もあるがタクシーを利用した方が安上がりだと確信した。税金は、上手に徴収されている。「お上は賢い」と言いたい気持だ。家計簿には、心覚えも記入しており、パソコンさえ開けばイベントの内容等も、即解る様になっている。

妻は「貴方に任せておけば安心。長生きしてね」と趣味の世界に励んでいる。私が料理を作れば「良く出来ている」と世辞を言う。旨く、煽てられて食後の片付け、ゴミ、庭の手入れ、自治会、確定申告等が私の担当となった。「ありがとう、助かるわ」と相変わらず、上手に使われている次第。日日是好日とは、こういう状態を言うのだろうか？

（藤治台　福島　健司）

歌舞伎観劇

梅雨特有の蒸し暑さが続く6月のとある1日、6年振りに歌舞伎座を訪れた。

歌舞伎座は3月に新しい建物が完成し、早くも東京の新名所になりつつあったが、連日大盛況でチケットの購入は困難を極めた。幸いにも午前の部が手に入り、ようやく出掛けることが出来たのである。

新しい歌舞伎座は、建築技術の粋を集めた堂々たる建物で、華麗で重厚な造りの外観を経て場内に入ると、巨大な空間が舞台まで広がっており、正に「歌舞伎の殿堂」に相応しい構造となっていた。

最初の演目は「鞘当」で、橋之助・勘九郎の渡り台詞が響くなか、歌舞伎独特の様式美が次々と展開された。続く「喜撰」では、三津五郎による洒脱な踊りが繰り広げられ観客席も華やかな雰囲気に包まれた。昼食休憩を挟み最後の演目は「俊寛」で、近松門左衛門作の人形浄瑠璃「平家女護島」を本外題とし、歌舞伎での上演頻度も高い。私は吉右衛門の熱演に魅入られながら、6年前に観た兄幸四郎扮する「俊寛」を思い起こし、高麗屋（幸四郎）と播磨屋（吉右衛門）との芸風の違いを心から楽しんだ。

場内の興奮と感動が醒めぬまま午前の部は終了した。登場する役者の真摯な演技と最新の舞台機構とが相俟って素晴らしい歌舞伎の世界を造り出し、それを目の当たりにした幸福感がいつまでも観客席に漂っていた。

歌舞伎座は、これからも日本人の心の拠り所としてますます存在感を高めていくことであろう。

近い時期に是非再訪したい。

（千成　堤　源太郎）

水彩について

里山や遺跡散策の昼食後小さなスケッチブックで風景を我流でたまに描いていました。3年前に『こうほう佐倉』に水彩・デッサン初心者という文をみつけ入会しました。

小学生の時、絵具、筆を使った様な記憶がある程度ですべてが初めての様な感じでした。里山の緑を表現するのにも単純に一色でなくいろんなミドリの色が多々あるのだなと認識します。その色彩を表現するのに苦労します。作品作りでは試行錯誤の繰り返し、白は初めから残す、濃淡を強く意識し描いていく。光と影の場合、影を濃く描く、遠近法では奥に行く程、物が小さく、距離は短く、近くは大きく、濃く、遠くは小さく、うすく描く。

絵は鑑賞する物と思っていました。自分が絵を描き、作品を他人に鑑賞していただくという事は私にとり、まったく別世界の話でありました。目に映った様を、感動した心のままをスケッチブックに写せたらどんなに素晴しいだろうと思うのですが、かなりむずかしい事かと思います。先生からは絵は本人が描いた枚数に比例すると指導されています。何枚も描いている内に自分のカラーが出るのではないかと思います。

70歳、80歳になっても健康で絵を描く事を友として続けられるという事は、生活の安らぎと憩いの源となるであろうと思われます。マイペースで続けて行くのみです。なかなか思う様に描けないと思いますが自分の作品はオンリーワンだと思っています。今後として果物、花、ビン等の静物はもちろん、国内外を旅し景色や自然を目に焼けつけ描いてみたいなぁと思っている昨今です。

（井野　安保　昌浩）

11 月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の２ページと３ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。**「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」**など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650 字（13 字×50 行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等の修正をさせていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館　TEL０４３－４８５－１８０１

〒２８５－００２５　佐倉市鏑木町１９８－３

URL　http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

さくら道

テレビを見ていた時、急に上杉鷹山という名が浮かんだ。

ケネデイ大統領が日本人記者団との会見中「あなたが最も尊敬する日本人は誰ですか」と質問された時、即座に「それはウエスギヨウザンです」と答えた。逆に日本人記者団の方がその人物を知らなかったというエピソードがある。

ケネデイは、日本の政治家として、国民の幸福を考え、民主的な政治を行い日常生活も文字通り一汁一菜、木綿の着物で通した鷹山の姿に自分の理想の姿をみたと思われる。

上杉藩の財政が逼迫し、破産を幕府に申告する過程で、鷹山は踏み止まり財政の立て直しを図った。

藩の中の上層部だけでなく全藩士に対しその力を結集して欲しい旨問いかけ、協力を要請し再建に取組み成功した。

（太田　誠一）

あとがき

２０２０年、東京五輪開催が決まった。招致演説での日本のプレゼンターの素晴らしいスピーチが特に印象に残っている。皇室をはじめとし、被災地代表のトップアスリートなど多彩なプレゼンターを擁し、少し大げさなジェスチャーだが表現力豊かな心のこもった演説に心を動かされたＩＯＣ委員も少なくなかったのではないか。日本の思いが確実に伝わった結果だった。

７年後の東京五輪は、成熟都市として、派手さや華美さでなく垢抜けた「おもてなし」の心を基本に開催するということである。今後インフラ整備も進み、経済波及効果の倍増等明るい未来も垣間見られる。この事が新時代の幕開けとなることを期待したい。

今後とも、生き方や体験談、未来への思いや考え方など多くの投稿をお願い致します。

（鵜澤　和良）